観自在菩薩（Āryāvalokiteśvara）像の考察

天野茂時

一、はじめに

わが国では、古来観音信仰が盛んで、それにつれて観音像が極めて多い。この観音像は如何なる形相に表現され、何か系列があるのか。そして、この像が時代的に見て、如何なる様式が見られるかを、美術史の立場から考察し、併せて島根県下に於ける文化財として指定を受けた、観音像について考察するのが本題の主旨である。

註、「観音」の呼称については後記するが、文中新訳、旧訳がそれぞれ使ってあることを了解されたい。

二、観自在菩薩の性について

観音像を拝すると、その性は、はたして男性であるか、それとも女性であるかゞ考えられる。それは観音像を男性と見た時代も、女性と見た時代もあった。このことを美術史上から考察する。

仏教が百済からわが国に伝来されたのは、飛鳥時代（AD7C～7C半）であったが、仏像は、従来の国神が「恐ろしきもの」「たたるもの」であるとともに、「恵むもの」「幸うもの」として信仰されたと同じように仏も信仰された。その当時仏は「仏神」「蕃神」「他国神」と呼ばれて、近よれない存在であったが、これは仏が超越的な在存であるという世界観が、飛鳥時代の人々の生の根底にあったからである。これが飛鳥仏に見られる、眼の杏仁形、口唇の仰月形、手指の爪は鋭く、顔面は比較的長く、首に三道は現われず、衣文は鋭く稜角的な刻出で、表情は古拙的微笑（ArchaicSmile）となって表現されている。従って、この仏像からは、素朴、緊張、そして憂欝なるものが感じられた。以上の形相からは、恐らく女性的には見られず、むしろ男性的に見られたものと考察される。

そして、隋唐文化が直接にわが国に伝来されて、新制度が確立したのが、白鳳時代（AD7C半～8C半）である。新制度である大化改新は、班田制などにより、或る程度の富が国民に分配された関係から、国民の生態度に、「大らかさ」が生れてきた。従って自然観も、飛鳥時代の未親和的自然観から、親和的自然観に変った。その例は天智天皇が、藤原鎌足に「春山万花艶、秋山千葉彩」をきそわせられたこと、また「わたつみのとよはた雲……云々」と、夕雲の美しさを歌った歌などに、それを見ることができる。この親和的というのは、感覚的に美を求めたものであるが、しかし白鳳時代の人々の感性は素朴であったため、おのずと幼児の無邪気な美しさを求めたのである。こ

の幼児に見られる美しさは「あどけなさ」「無邪気さ」である。これが仏像に表現されて、飛鳥仏の緊張から柔軟性へと変っていることは、顔面の童顔、首の三道、頭部及び臍が比較的大きく、眼の下瞼が直線的で、鼻梁は長く明確、姿態は遊足体、半跏思惟体などによって理解ができる。この像からは、あどけない中性的な幼児と見られたのである。

ところが、天平時代（AD8C半〜8C）になると、「咲く花のにほふが如く今さかりなり」、また「しこのみたてと……云々」と歌ったように、天皇を中心に現世謳歌の時代と代った。従って国民の青春昂揚の生活が、花々しく展開した時代である。

薬師寺（奈良）境内の仏足堂の石碑に刻まれた、「恭仏跡」の八首の歌中に「ますらをの進み先立ち踏める足跡……」、また「ますらをの踏み置ける足跡は石の上に……」とあるが、これはまさしく、仏像を男性と見たことを語るものである。それ故に、この時代の仏像は、男性的塊（mass）的、即ち内的充実の力が刻出されているので、端正、壮美が見られる。ここで、天平時代には、仏像を男性的に見たといえる。

次ぎの貞観時代（AD8C〜10C）は、天平時代の如く栄える時代ではなく、むしろ国民の生態度は、消極化してきた時代である。それは社寺、貴族などの権門勢家の荘園は増加し、土地の分有制は崩れんとし、貴族の権力が増大するにつれて、官僚政治は無力となり、他氏排侑と抑圧が盛んとなって、一般国民は貧窮の途をたどるに至ったことが一因である。大体西暦八百年代は、東洋は衰退した時代である。それは唐、新羅、勃海の滅亡でもうかがわれる。没落は若さの消失で、所謂老成時代と称すべきである。この老成時代は、自づと自己意識が旺盛となり、国家意識は稀薄となる。この時代に支那からは「無為自然」の老荘思想も移入され、積極的な国民は、個人的な隠遁的なものとなった。他面僧侶は不遜となり、僧籍にかくれた無頼の徒も多く出て、仏教の内部的腐敗の刷新が抬頭し、深遠な教理を希求するに至った。かの最澄、空海が天台、真言の宗派を興した理も理解ができる。この宗派の教儀は「即身成仏」であり、人間の生に対する問題を取り上げ、大日如来を主尊とし、特に儀軌が確立し、明王部ができた。従って、力の表現は超現実的なものとなり、外部的な力（Volume）と、官能的姿態の像が多く現われるに至ったので、仏、菩薩は女性的な官能的、肥満的なものとなった。

ところが、藤原時代（AD10C〜12C）になって、仏寺の経営は国家から貴族に移り、一身一家のために寺院は建立されるに至った。比叡山では、特殊な浄土教、即ち阿弥陀如来を主尊とする念仏三昧の仏教が起った。この教えは衆知の如く、面倒な理論、難行によらず、ただ念仏を称名することによって、極楽浄土に往生できると説いた。そして現世にも浄土出現を念じ、仏像、仏画に特殊な表現様式が生れた。それは如来像も慈悲、円満具足で、繊細で甘美なものとなり、女性的性格のものが多く育った。それに、遣唐使の廃止により、国風文化が発展し、特に貴族の生活が耽美的生活となり、ついに「この世をばわが世」と称し、「望月のかけたることもない」と詠じさせ、その生活は、優雅、即ち優美であり、典雅であった。この生態度の中で、当然造像も極めて女性的となり、女性として見られたのである。そして仏像彫刻の最後的時代である。鎌倉時代（AD12C半〜14C半）が

続く、この時代は宋様式が移入され、初期に於ては、鎌倉対京都、貴族対武家という二重性が伏在したが、遂次武家が勢力を得て武家的世界観が確立された。それは現実主義、特に自然主義（naturism）で、自然崇敬の念となり、自然の無限性と人間の有限性が強く意識された。特に仏像彫刻では、東大寺、興福寺の復興事業に従事した仏師達は、天平彫刻の理想的写実に共鳴をしたので、天平復帰ともいわれた。こうした原因から、たくましさ、勇ましさ、りりしさ、男らしさの像が大部分を占めた。従って、仏像は勇健なる美しさ、即ち男性と見られたのである。

以上、美術史の立場から、その見方の概略を考察したが、本然の仏像、特に菩薩、わけても観音の性は何であるか。しかし仏像は美的鑑賞の対象ではなかった。従って仏師達は、造形美を追求したわけではなく、経典の意味の造形を通しての感知であり、意味への礼拝であった筈である。従って造仏技術は、造形技術であるとともに、信仰の行事であったから、この造像の本質から、観音像の性を考えねばならぬ。上述によって、時代々々の見方について概要を述べたが、それは視覚性の立場からであった。根本問題は、経典の造形化に於ての問題である。維摩経観衆生品に「仏は説き給う、一切の諸法は男に非ず、女に非ず」とあるが、これが仏体造形の原理であろう。これは仏性であるということである。

仏像は仏性の表現であり、観音像も仏性の表現で、人体に模したとは云え、人間性を超越しなければならない。人体に接近しつつ、人体を超越するときの瞬間の芸が、造仏技術の核心である。このことは、特に仏、菩薩の造像に於て重要である。観音は当然菩薩であるから、仏性ということも当然明かになる。

以上、視覚性の立場からと、その内面的な立場からの二方面から、観音の性について考察したのである。

三、観音菩薩の呼称について

観音は「観音」「観世音」と呼び慣らわして、別に疑問をもたれないが、般若波羅密多心経には「観自在菩薩行深般若波羅密多……」と、また観音経は、「妙法蓮華経観世音菩薩普門品第二十五」とある。いづれにせよ、この名称は梵語の Sanskrit の訳であって、この訳に旧訳と新訳がある。

新訳は、唐の玄奘三蔵が、親しくインドを遍歴して、研究の結果 Sanskrit を漢訳したのが新訳であって、それ以前の訳が旧訳ということになる。新訳は「観」と「自由自在」に分けて「観自在」菩薩が正しいとした。故に「般若波羅密多心経」の呼称は新訳の呼称である。この観自在菩薩は、徹頭徹尾、大衆のために大慈大悲を垂れ給うのである。このことから「普門示現」の名称が起った。即ち「普門」とは、狭き門の反対で、仏、菩薩は神通力によって無量の門を開き、一切衆生を、この門から自由に救うと説くのである。この故に観自在菩薩は、種々の身を現わして、衆生に接せんと努力されるのである。これが「六観音」「七観音」「三十三観音」等の思想である。

註、菩薩は、如来(Tathāgata)に次ぎ、摩訶菩提薩埵(maha-Bodhisativa)である。「摩訶」は「大」、菩提は「道」「覚」即ち真理。「薩埵」は「有情衆生」と訳し、摩訶菩提薩埵とは「大道心覚有情」で、この「菩」「薩」で、「菩薩」と称す。故に菩薩は、諸仏の覚者を得んがために修行を旨とする大士で、その修行は、上に菩提即ち不生不滅の真理を覚

り、仏道の極致に到達する聖者の大道を求め、下は衆生を済度するというのであるから、菩薩は二つの大願をもった修行者ということになる。

四、六（七）観自在菩薩像の考察

観音菩薩が、阿弥陀如来補処[註]の菩薩として経典に誌され、あまねく知らるに至ったのは、二千年前にさかのぼる。ところが印度の密教時代に各種の観音の出現を見たので、以前からの観音に、聖（Arya）を加えて聖観音と呼び、その後の多数の観音を総括して、変化の観音と称している。しかし密教でも聖観音を諸観音の第一として礼拝し、顕教でも、変化観音を聖観音と等しく礼拝しているので、密教と顕教の諸観音を分けるのは単に教理上からで、信仰の立場からは、区別の要はないと思う。ただ観音の尊容を論ずる上にては、密教観音は密教経典に従わねばならぬ。顕教の聖観音は、密教の如く明記されていないから種々の姿で造られている。

註、補処とは、一生補処Ekajiti-pratibodhaの訳で、只一度だけこの世の生死の世界にしばられだけで、次ぎの世界には、仏と生まれることができる地位で、菩薩としては最高位をいう。

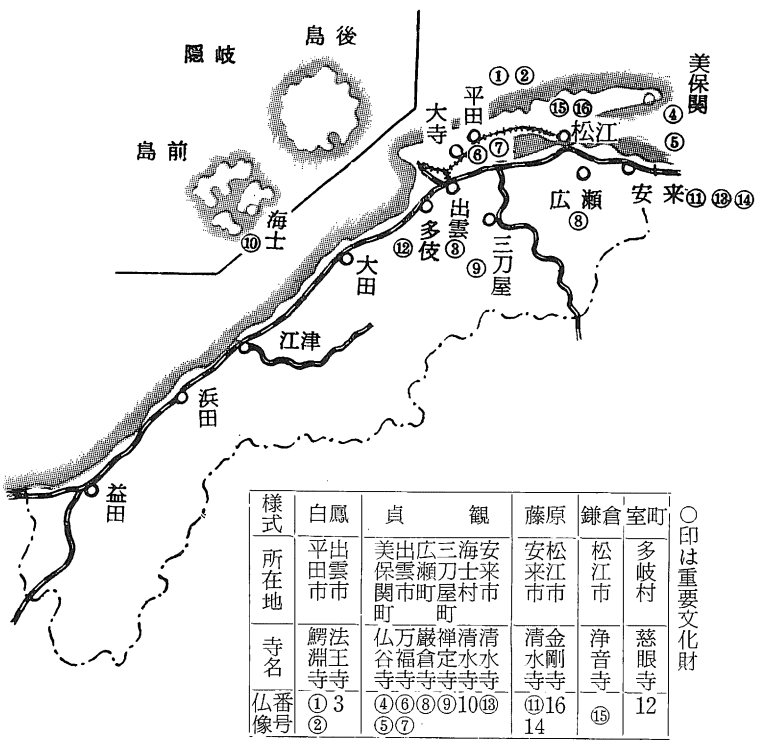
六観音とは六種の観自在菩薩のことであるが、この一団を立てたのは経典の説ではなく、密教の考えであって、その内容は、それぞれ自宗の特色を発揮し、最も理想的、合理的な内容であるべきを主張し、真言宗（東密）では、1、聖観音、2、十一面観音、3、千手観音、4、馬頭観音、5、如意輪観音、6、不空羂索観音としているが、天台宗（台密）にては、6、不空羂索観音に代り、准胝観音を数えている。上記の台密、東密の諸観音を網羅した、七種の観音を七観音と称しているが、六観音の方が普通化されている。この六観音の思想は、「六道」の思想から生れたものである。即ち 1、地獄道 2、餓飢道 3、畜生道 4、修羅道 5、人道 6、天道をいうのであって、観自在菩薩は、この六道のそれぞれの苦を救済し給うとして、各六道に各観音を配置したものである。そして、この六観音像は、それぞれ特色ある形相である。これは「儀軌」という規定によるものである。特に貞観時代に、密教が伝来してから、厳重な儀軌が定められたが、この儀軌は口伝であり、たとえ覚え書きがあっても「他見を許さず」で、研究には非常に難事であった。仏像もこの儀軌に則して造像され、自己の創造は許されなかった。従って貞観時代以前までの造像は、普通、儀軌以前の像と称し、多少儀軌所立の条件と相違する像もある。以下儀軌にもとづく六（七）観音について考察するが、その前に島根県に於ける重要文化財、また県指定文化財の彫刻（仏像、神像）は合計六十八軀であるが、その中、観音像は、左表に示す十六軀である。これを見てもいかに観音信仰が盛んであったが分かる。そしてこの像の分布図を示したが、ほとんどが出雲部にあるが、このことは別の意味で興味のあることである。

島根県に於ける聖観音像（昭和四二、八、三一現在）

名称	所在	措定年月日	時代様式
① 聖観音立像（金銅）	平田市鰐淵寺	明三五、七、三一	白鳳時代
② 仝　右	仝　右	仝　右	仝　右
3 仝　右	出雲市法王寺	明三七、六、一二	仝　右
④ 仝　右（木造）	美保関町仏谷寺	大九、四、一五	貞観時代
⑤ 仝　右	仝　右	仝　右	仝　右
⑥ 仝　右	出雲市万福寺	明三五、七、三一	仝　右
⑦ 仝　右	仝　右	仝　右	仝　右
⑧ 仝　右	広瀬町巌倉寺	仝　右	仝　右
⑨ 仝　右	三刀屋町禅定寺	昭一七、一二、二三	仝　右
10 仝　右	海士村清水寺	昭三九、一、二九	仝　右
⑪ 脇待聖観音坐像（木造）	安来市清水寺	明三五、七、三一	藤原時代
12 聖観音坐像（青銅）	多伎村慈眼寺	昭三八、七、二	室町時代
⑬ 十一面観音立像（木造）	安来市清水寺	明三五、七、三一	貞観時代
14 仝　右	仝　右	昭四一、五、三一	藤原時代
⑮ 仝　右	松江市浄音寺	明三六、四、一	鎌倉時代
16 馬頭観音坐像（木造）	松江市金剛寺	昭三四、九、一	藤原時代

○印は重要文化財

上表の観音像分布図は次の如くである。



様式	白鳳	貞観	藤原	鎌倉	室町
所在地	平田市 出雲市	美保関町 出雲市 広瀬町 三刀屋町 海士村 安来市	安来市 松江市	松江市	多岐村
寺名	鰐淵寺 法王寺	仏谷寺 万福寺 巌倉寺 禅定寺 清水寺 清水寺	清水寺 金剛寺	浄音寺	慈眼寺
仏像番号	①3 ②	④⑥⑧⑨10⑬ ⑤⑦	⑪16 14	⑮	12

○印は重要文化財

（一）聖観自在菩薩（Āryāvalokiteśvara）像

普通観音さまと呼ぶ場合は、聖観音をいう。本尊は、梵語の阿黎耶（Ārya）の訳で、尊いという意であるが、しかし、この尊は、観音以外の菩薩にもつける一種の敬称である。そして聖をつけた観音は、変

化観音の出現前の観音で、大本（おおもと）になる観音を指す。また正観音とも書くが、これは多くの変化身や三十三応現身などの総体であり、根源である故に正をつけたと説明する。

本観音は、西方極楽浄土の補処の菩薩とし、阿弥陀如来の左脇侍となる観音と、又種々の国土に、種々の身を現じて、諸々の苦悩に悩む一切衆生を救済する応現身としての観音（三十三応現身）との二つに分けられている。聖観音像は、宝冠の正面に「化仏」が標示され、六（七）観音の一尊としては、六道中の餓飢道の三障を破るとされている。本観音は、顕、密両教の経典中に広く説かれ、且つ信仰も広範囲におよんでいる。

顕教の観音には、表現に自由があった。貞観時代以降の聖観音は、大部分密教の観音である。聖観音にも多くの種類があり、もっとも多く見られるのは、曼荼羅にある像容である。代表的なものは、阿弥陀仏の脇士像、来迎図中の観音、胎蔵界曼荼羅中台八葉院の観音、同蓮華郡院の観音、同釈迦院の観音、同文珠院の観音、金剛界曼荼羅成身会の観音などであるが、他にも変った像容がある。

註　三障とは、貪慾、怒り、愚知等を起すさわりの煩悩障。殺人、盗み、うそをつく等のさわりの業障。人間界の老、病、死、地獄界の苦しみ等の如く、その世界につきまとう苦しみのさわりである報障の三つのさわりをいう。

この聖観自在菩薩像で、島根県に於いて文化財に指定された像は十二軀ある。

1、重要文化財　聖観音立像（金銅）鰐淵寺

2、仝　　右　聖観音立像（金銅）鰐淵寺

1．重要文化財
聖観音立像（金銅）
鰐淵寺蔵

2．重要文化財
聖観音立像（金銅）
鰐淵寺蔵

前者は金銅鍍金、像高九九センチ、台座の框（かまち）に「壬辰五月出雲国若倭部臣徳太理為父母奉作菩薩」と銘文が横に陰刻されている。この銘文により、持統天皇六年（六九二）、即ち白鳳時代の造像とされ、日本美術史学上に於て貴重な像とされている。

宝冠は三面頭飾、その正面に化仏があり、左手に水瓶、右手は施無畏の印と見られるが、指の欠損は痛々しい。天衣は両腕にかかり左手にもつれて、体軀の前でU字状をなし流麗である。鍍金は白緑色に変り、その緑青は時代を偲ばせる。本像は素朴で誠実さが直感されるが、童顔は成長した少年の顔と見られ、優美、明朗で白鳳仏の特色が見られる。

後者は、像高四四センチ、面相は幼児性を脱している。天衣は飛鳥

仏の鋭さが残っている。腰のくねりには不自然さがあり、技巧的に見られる。右手の欠損は前者よりひどく痛々しい。全体に柔軟な感じをうけるのは白鳳仏の特色である。根本堂の本尊であった。

3、県指定文化財　聖観音立像（金銅）法王寺

本像は、三十数年前に本堂の祠から発見された、像高三三センチの立像である。頭部は三面頭飾であるが化仏はない。童顔、童身で、上半身を右にかけた自然な姿態であるが、惜しいことに両手の下膊部、及び天衣が欠損している。両手の下膊部には、手を挿し込んで止めるという珍らしい技法が見られる。本像も前記二像と同じように側面から見ると、浮彫的である。台座も白鳳様式である。そして造像は鑄型法によって製作されたものである。

4、重要文化財　聖観音立像（木造）仙谷寺

5、重要文化財　聖観音立像（木造）仙谷寺

前者は、像高一五一・五センチ、頭部には五智宝冠を載き、左臂は上方に屈して蓮華を持っている。顔面の頬と鼻の間の刻り、そして胸部の隆起は少いが全体的に見ると、量的（Volume）形成である。衣文の形式は、貞観時代の熟練した飜波式刀法ではなく、地方作を示す、原初的な飜波式刀法であって、貞観時代の像と見られる。

後者は、像高一五一センチ、イチイ材の一木彫成で、寺では虚空蔵菩薩と称している。頭上には五智宝冠を載き、右足を浮かせた安息の態は、やすらぎを与える。衣文の刻出は深く、随所に旋転文が複雑な動きを示しているが、特にW字形の天衣の自由さは格別である。前者より彫刻の技術も進歩しているが、未だ角立体を超克してはいない。しかし貞観時代の堂々たる量的形成は、古様を示し、地方作としては優作である。

6、重要文化財　聖観音立像（木造）万福寺

7、重要文化財　聖観音立像（木造）万福寺

前者は、像高一五〇センチ、ヒノキ材の一木彫成の立像で、万福寺

3．県指定文化財
聖観音立像（金銅）
法　王　寺　蔵

4．重要文化財
聖観音立像（木造）
仙　谷　寺　蔵

5．重要文化財
聖観音立像（木造）
仙　谷　寺　蔵

6．7．重要文化財
聖観音立像（木造）
万福寺蔵

仏像群中の小像である。宝冠は高く、左右対称的な単純な像であるが、温和な姿態の中に、精神性が満ちているのは、貞観時代の像の特色を見ることができる。

後者は、像高一六〇センチ、ヒノキ材の一木彫成の立像である。頭部の宝髻は高く、右手は施無畏の印、左手には蓮華を持つ姿態であるが、腹部と胸部との統一が失われていて、変化のないまま下半身が刻出されているので、散漫な感じがする。矢張り地方作のためで、円熟した彫像とは見らない。時代は貞観時代である。

8、重要文化財　聖観音立像（木造）巌倉寺

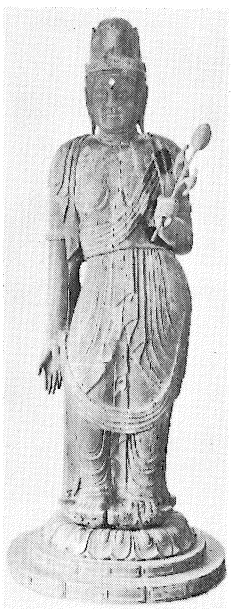
本像の像高は一八〇センチ、ヒノキ材の一木彫成である。頭部には高い宝冠を載き、白毫があやしく光っている。腰を左にひねり、右手を下に伸ばし、左手に蓮華を持っている形式は、仏谷寺諸像と似ている。像全体は扁平的であるが、重厚性が強く、下半身の衣文に飜波式刀法が見られる。この衣文は流麗であるが、矢張り地方作である。顔面および体の量的形成などは貞観時代の特色である。

9、重要文化財　聖観音立像（木像）禅定寺

本像は、像高二二七センチ、一木彫成の大像である。頭部の肉髻は高く、額から鼻にかけての太い刻線、唇、顎の隆起、さては胸部から腹部にいたる量的形成、そして天衣、裳に見られる衣文の流麗さと、そこに見られる飜波式刀法などは、前記の諸観音像に比して洗練された手法である。そして重量感、安定感は貞観時代の特色を備えている。特くに地方作とは見られぬ優作である。

10、県指定文化財　聖観音立像　清水寺

清水寺（せいすいじ）は、隠岐、海士村大字知々井にある、真言宗の小寺院である。本像は同寺の秘仏で、総高一八〇センチ、ヒノキ材の一木彫成で、仏谷寺諸像、禅定寺の像と形式を同じくするものであ



8．重要文化財
聖観音立像（木造）
巌倉寺蔵

9．重要文化財
聖観音立像（木造）
禅定寺蔵

る。特に明治二年排仏毀釈の大難は、隠岐国に於ては特にひどく、ほとんど全部の寺院、仏像は焼却、破壊された。伝えによれば、本像は当部落の篤信の人々によって、騒動中に隠匿されて現在に至ったものである。子安観音とも呼ばれて、地方人の信仰が篤い。

さて、本像は破損、虫喰いが多いのは惜しい。特に左臂の下部をなくし、右手先、両足指、腹部の天衣に虫喰いが多い。顔面は鼻の先きを欠いだだけで完全である。肉髻は高く、眼は彫眼で貞観仏特有の形相である。上唇は前に出ている。衣文の刻出は、浅く飜波式刀法は原初的である。これは地方作のためであろう。体駆はやや右足に力のかかった格好である。右手は長く垂下しているが、指は虫喰のために哀

10. 県指定文化財
聖観音立像（木造）
清水寺蔵

11. 重要文化財
脇待聖観音坐像（木造）
清水寺蔵

れである。しかし地方作としては優作であり、仏谷寺、下福寺、禅定寺の重要文化財の聖観音像と同列である。貞観様式の量的形成により、重厚であり、森厳である。

11、重要文化財　阿弥陀如来脇待聖観音坐像（木造）清水寺

本像は、像高六八・二センチ、跪坐し、やや上体を前方に傾けた木造の左脇待である。既述したように、本観音は極楽浄土の補処の菩薩であり、標識に化仏があったが今では失われている。両手で蓮華を持った形で、その姿態は静穏で、慈悲相があふれている。膝は低く、衣文は膝上で消えている。本像は、来迎仏としての気品があり、見るからに女性的で優雅であるのは、藤原時代の特色である。山陰地方では、唯一の実に温和な美しい像である。

12、県指定文化財　聖観自在菩薩坐像（青銅）慈眼寺

寺伝によれば、本願寺開山、秀関和尚が応永年間（一三九四―一四二七）高麗に渡り、梵鐘、本坐像、および自分の肖像を描かせて持ち帰ったという。その中、この像を慈眼寺に安置した。従って本像は朝

12. 県指定文化財
聖観音坐像（青銅）
慈眼寺蔵

鮮仏であって、島根県に於ては珍らしい仏像である。

本像は、総高六九・二センチ、顔の長さは一二・一センチの青銅造りである。光背は舟形光背であるが、台座とともに後補である。そして手指と左膝部が欠損しているのは痛々しい、宝冠、首かざりは、せん細で、にぎにぎしく作られているが、装飾過多の感がある。白毫は大きく、顔は長く、眼は彫眼であり、一見して白鳳仏の眼に類似し、口唇の作りは上唇と下唇がはなれいる、頬はふっくらとして童顔、三道も刻まれていて、温和な面相は観音の慈悲の想である。衣は通肩で、衣文は自然である。

（二）十一面観自在菩薩 Ekadaśamukha 像

本像は、密教招来前に多くの造像をみた像であって、変化観音の一つとなっている。頭上に十一面をつけ、修羅道の三障を破るとされて広く信仰された。頭上の十一面は、正面三面が菩薩面で慈悲相、左側三面が瞋怒面、右側三面が狗牙上出面で、後方に大笑面一面、そして頭上に阿弥陀の化仏一面がある。しかし特殊な像として、頭上十面と像自体の顔を合せて十一面とする像もある。この十一面の前後左右の十面は因位の十地、最上の仏面は第十一地仏果を表わしているという。臂は普通二臂であるが、四臂、六臂、八臂の尊容もある。左手には水瓶、右手は与願印を示すもの、左手には蓮華、右手に施無畏の印相の像も多い。

本観音の本誓は、衆生の十一品の無明を断尽し、十一地の仏果を開かしむるというのである。この本誓が十一面となって現われている。この十一面の化仏の配列には種々形式がある。仏面を除く十面が一段のもの、二段、三段のものもあり、また観音の標識としての化仏を、正面につけるのが通形であるが、十一面にそれぞれ化仏をつけることもある。

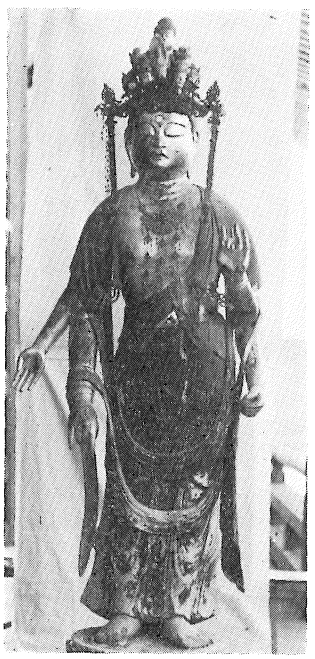
島根県に於て指定を受けた本観音像は三軀ある。

13、重要文化財　十一面観音菩薩立像（木造）清水寺

14、県指定文化財　十一面観音菩薩立像（木造）清水寺

前者は、清水寺根本堂の本尊で秘仏である。ヒノキ材の一木彫成、像高一七〇センチの立像で、天衣を肩で結んで垂下し、また宝冠の両側を紐で結んだ様式は、本像独自のもので珍しい。衣文の形式は貞観様式で、飜波式刀法が装飾化されて刻出してあるが、幾分力に欠げた

13.　重要文化財
十一面観音立像（木造）
清水寺蔵



14.　県指定文化財
十一面観音立像（木造）
清水寺蔵

弱さが眼につく。顔面は稜角性にとみ、眼、鼻、口が強く彫り出さて魁偉を感じる。本尊は肉体の露出部分が少いが、裳を通して肉感性が現われ、貞観時代の特色を具備している。頭上の十面は一段に配列されている。

後者は、清水寺根本堂の裏にあり「裏観音」と呼ばれて信仰されているが、像の全貌を拝した者は極めて少く、昭和四十一年度に県指定を受けた像である。

像高一八四センチ、ヒノキ材の一木彫成の立像である。頭部には三段に十面の仏面があり、この仏面は優作である。しかし正面の化仏は後補である。眼の上瞼は直線状、下瞼は孤状で、やさしく下腑している。白毫は水晶で、顔面はふっくらとして、貞観仏の魁偉はない。特に本像が四臂であるのは珍しい。ただし左手の指、下方にある手は後補である。像の金色は、そのまゝ当時を示すものである。本像は女性的で優雅で、藤原時代の特色を備えた像である。台座は高さ三二センチであるが、江戸時代の作である。

15、重要文化財　十一面観音立像（木造）浄音寺

本像は、像高一四九センチの立像で、胎内に「文永□□正月□□」の銘札があったと伝えられているので、鎌倉時代の造像であることが、明確にされている。頭上の十面は一段に配列されている。額の髪ぎわは曲線状、衣文の刻出の自然な流麗さ、そして裳は長く、足の甲を深くおおった技法は、鎌倉彫刻の特色である直観的表現の手法が見られる。姿態は僅かに腰をくねらせて、右足を浮かす遊足体である。右手は素直に垂下して施無畏の印を結び、左手は屈臂して、蓮華の挿された水瓶を持っているが、これは後補である。眼は鎌倉彫刻に多く使われた玉眼ではなく彫眼である。口唇は朱色で彩色され、鬚が描かれている。そして台座は七重蓮華座であるが、その蓮弁は力づよく写実的である。敷茄子には格挾間様の彫刻が施され、彩色が施されている。像と同じく鎌倉時代の作である。

15.　重要文化財
十一面観音立像（木造）
浄　音　寺　蔵

（三）不空羂索観音 Amoghapāśa 像

本像は、天平時代の遺作が多いが、藤原時代となり、本尊が、藤原時代の本尊として信仰されるにいたり、一般には造像されなかったためか、遺作が極めて少い。本尊は人道の三障を破るとされた変化観音の一つである。

不空羂索の羂索とは、慈悲の索であって、世間の魚網雁繩は、魚鳥の網目に漏れることあるも、本観音の慈悲の羂索は、一切衆生漏れることがない。羂網を大千界に覆いて修行者に奉化し、必ず悉地を与えて利益を施す意であるという。この義が空しくないところから不空という、法華経に、心念不過空と説くは、この意である。本尊は蓮花部の悉地王であると、教舜の秘鈔口決第十五不空羂索法にある。要するに、本尊は大悲の羂索をもって、一切の衆生を救済し、諸願を空しからしめないが故に不空羂索と名づけられたのである。

像容は、経典に種々説かれているが、我が国でみられる像は、一面

八臂、三面四臂、一面四臂、三面六臂、三面十臂、一面十八臂、十一面三十二臂像等があり、持物によって異形像も多数である。

島根県に於ては、本像は見られないが、奈良東大寺三月堂の主尊が有名である。

（四）准提（胝）観自在菩薩 Cundi 像

本尊は、普通准提仏母 Cundibhagavati また七俱胝仏母 Saptakoṭibuddhamātṛ とも呼ばれて、台密では不空羂索観音に代って、本尊が六観音の一つに数えられている。従って人道の三障を破ることになる。准胝は清浄と訳し、純潔の徳をあらわし、そして聡明、争い、延命、治病などの現世利益の徳のある観音とされている。経軌には観音として説かれず、七俱胝仏母と称せられて、過去無量の諸仏の母である意味がある。しかし六観音中の一観音として信仰されてきた歴史的な意味から、准提観自在菩薩として信仰された。

像容は、一面十八臂で立像も坐像もあるが、いづれも蓮台上にある。貞観時代以降に信仰された関係か遺品は少い。我が国でも有名な像は二軀ばかりで、中に天禄元年銘の新薬師寺（奈良）の像がある。島根県には、現在まで本像は見あたらない。

（五）千手観自在菩薩 Sahasrabhujs 像

本尊は、その本誓により、身には千手千眼を具有するので、正しくは千手千眼観自在菩薩と称するのであるが、普通は千手観音と称している。中国では、千の慈眼、千の慈手を有し、衆生を済度する尊として、大悲観音と称し圧倒的な信仰をうけた。我が国でも、十一面観音についで早くから造像され信仰された。本尊も変化観音の一つで、地獄道の三障を破るとされている。

千手とは、菩薩救済の手のおよぶ範囲が広大で、その方便が無量であることの象徴である。普通は中央の二手を除き、左右二十本づつ計四十手像であるが、これは一手がよく二十五有界の衆生を救うため、四十手を二十五倍して千手と称し、この一手ごとに一眼があるところから千眼があることになっている。この四十二手（臂）像の造像前には、実数千手をもつ像（奈良、唐招提寺）が造像された。

経軌に説かれた像容は、二十七面四十二臂像、十一面四十二臂像が代表的な像とされている。そして、この四十二臂には、それぞれ持物が定められている。持物については記載を略す。

島根県にも千手観音像は見られるが、未指定である。特に我が国で有名な像は、奈良、唐招提寺。大阪、葛井寺の乾漆の根本千手観音像、京都、広隆寺の木造四十二臂千手観音像がある。

（六）馬頭観自在菩薩 Hayagrīva 像

本尊は、馬頭明王、大力持明王、馬頭金剛明王、獅子無畏観音等とも称せられ、変化観音の一つで、頭上に馬頭を載く像と、人身馬頭の像の二種がある。本像は観音像の慈悲相と違って、忿怒の激しい表情で造像されている。畜生道の三障を破るとされ、煩悩を断じる功徳を有し、特に馬の病気と安全を祈るとされている。この忿怒相は、密教の明王としての性格が強いと考えられるが、明王とは考えられていない。像容は、三面二臂、三面四臂、三面八臂、四面八臂、一面二臂、四面二臂など多くの異像がある。

16　県指定文化財　馬頭観自在菩薩坐像（木造）金剛寺

本像は、像高一〇八センチ、カヤノキ材の一木彫成の坐像で、頭上に馬の顔面が見られる三面二臂像である。この三面の右面は忿怒相、

15. 県指定文化財
馬頭観音坐像（木造）
金剛寺蔵

左面は菩薩面、正面は忿怒相である。眼は彫眼で目尻には、しわが刻出されている。口は開口で細い歯が上下に並び、白色の彩色が施してある。その歯の中、上に反った二本が牙となって鋭く刻出されている。二臂は合掌し、足は結跏趺坐、上体をやや前方に傾けている。もとは彩色像であったが、現在は色彩は脱落している。衣文の刻出は荒く、飜波式刀法の名残りが見られる。本像も地方作であるが、地方作としては沈静した端正さは美ごとであって、藤原時代の像として貴重である。

（七） 如意輪観自在菩薩 Cintāmanicaka 像

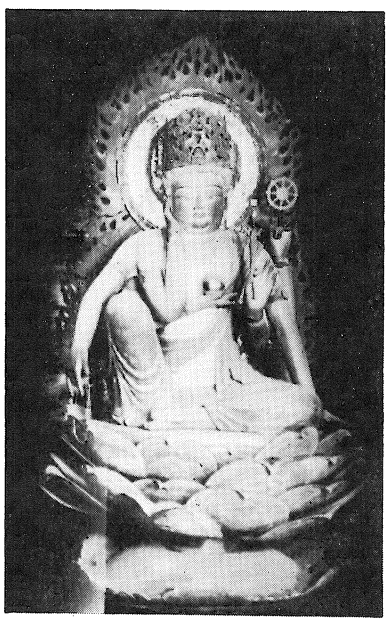
本像も変化観音の一つで、我が国でも早くから信仰された。如意輪の如意とは、如意宝珠、輪とは法輪を意味し、ここから如意宝珠の三昧に住し法輪を転じて、天道の能化とされている。

如意輪陀羅尼経に「また二法あり、一は在世間、二は出世間、世間というは（中略）有情を摂化して富貴資材勢力威徳皆悉く成就せしめ、出世間とは、いわゆる福徳慧解資糧荘厳し、悲心増長して苦の有情を救い、衆人に愛敬せらる」とある。本像の像容は、二臂、四臂、十二臂像などがあるが、貞観時代以降は、一面、六臂像即ち、右足立膝にて坐し、右第一手を頬にあてて思惟の相、第二手は宝珠を持つ、第三手に念珠、左第一手は地に垂す、第二手は蓮華花、第三手に輪宝を持つ尊像が多いので、密教の伝来から急に信仰が盛んになり、従って造像も多くなったと考えられる。

島根県に於ては、本像は現在まで見ることはできないが、わが国で有名なものに「天下の三如意輪」と称される、観心寺（大阪）室生寺（奈良）神呪寺（兵庫）の像がある。特に観心寺の像は、貞観時代の特色を具備した像で、最も著名である。

五、三十三観自在菩薩の考察

三十三観音は、文献によれば、唐時代以降に中国でつくり上げられたもので、前述した六（七）観音とは全く関係がない。特くに唐末から宋にかけて発達した禅宗では、この三十三観音を信仰し、彫刻、画像にすることが盛んであって、我が国にもこれが移入され、足利時代



如意輪観自在菩薩像
観心寺（大阪）

（AD14C半～16C半）から、この三十三観音像と描く画僧が出た。その図は信仰の対象より、鑑賞の対称として、床の間にかけて、楽しまれたもので、観音像の背景に岩窟、瀑布、樹木などが多く描かれている。これは礼拝の尊から鑑賞の尊に代ったところに興味があるが、それだけ観音は、大衆と深い関係が生じたと解すべきであろう。

ところが、この三十三観音については、経典にも説かれていない。強いていえば、聖観音の種類が三十三種類あると見た方が適切であるようである。その三十三観音は次ぎの如くである。

一、楊柳観音（右手に楊柳の一枝を持つ）二、竜頭観音（竜上に乗る）三、持経観音（右手に経巻をとる）四、円光観音（光明中に現われる）五、遊戯観音（雲上に半跏す）六、白衣観音（白衣をまとう）七、蓮臥観音（蓮華上に乗る）八、滝見観音（岩上に坐して滝を見る）九、施葉観音（池辺に坐して蓮華を見る）一〇、魚籃観音（大鯉上に乗る）一一、徳王観音（池辺に坐し楊桠をとる）一二、水月観音（一葉の蓮瓣に乗り水上に浮き月の映るを見る）一三、一葉観音（水上の一葉の蓮瓣上に半跏する）一四、青頭（しょうとう）観音（岩上に坐し水瓶にさした楊桠をおく）一五、威徳観音（岩上に坐し蓮華をとる）一六、延命観音（上岩に坐し右手を頬にふれる）一八、岩戸観音（岩窟中に坐す）一九、能静観音（昔石によりかかる）二〇、阿耨（あのく）観音（滝の傍に坐す）二一、阿摩提（まだ）観音（岩上に坐す）二二、葉衣観音（衣中に両手を入れる）三三、瑠璃観音（水上の蓮瓣上に立ち両手で瑠璃器を持つ）二四、多羅尊観音（雲上に立つ）二五、蛤蜊観音（蛤蜊の上に坐す）二六、六時観音（右手に経冊をとる）二七、普悲観音（白衣にて立つ）二八、馬郎婦観音（吉祥天の如き天衣をつける）二九、合掌観音（合掌して立つ）三〇、一如観音（雲に半上跏する）三一、不二観音（水上の蓮華上に立つ）三二、持蓮観音（両手で蓮華を持つ）三三、灑水観音（右手に梅枝左手に灑水器を持って立つ）。以上が三十三観音であるが、無理に作り上げられた感がある。特に、その中でも白衣観音、楊柳観音はよく知られている。この三十三観音を信仰して、いわゆる三十三観音巡礼制度ができたが、その起源について次ぎの如き伝説がある。

養老年間（AD717～723）一、和泉国長谷寺に徳道上人という高徳あり。死後地獄に行ったところ、閻魔大王から「今一度娑婆に帰り、日本には観音の霊場が三十三ケ所あるにより、巡拝の証として、各霊場から宝印の印影をもらうべきこと」、を告げられ、上人は三十三所の霊場を巡拝し宝印を得たという。現在の三十三所の霊場、そして各寺院の功徳を分かつ、特有の宝印の捺印が習慣として残っている。

また一説には、花山法皇が石川寺の仏眼上人や、書写山の性空上人などの勧めで、霊場巡礼の功徳を知られたことも伝えられるが、すでに藤原時代には、三十三所巡礼が盛んであったと文献にあるので信じ難い。

以上、観音像について六（七）観音、三十三観音について述べたが、これ以外に経典にあり、礼拝もされ、造像を見た数種の観音もあるが、これは紙数の制限のためと、むしろ混乱するために、上記にとゞめておいたことを付記しておく。

六、観音信仰について

われわれ衆生の「迷」は無限である。この「迷」から解脱したいと

願うのもわれわれ衆生である。ここに信仰があり、宗教がある。これを仏教で考えると数多い仏がある。この仏は、それぞれの本誓により専門があり、専門外のことは、他の専門の仏にと、お答があろう。しかし、この「迷」から「現世利益」とか、「来世得脱」という、総ての願望を達成していただく仏があれば誠に有難いことである。実はこの願望をかなえる一尊がある。これこそ「観自在菩薩」である。

観自在菩薩は、他の仏に見られない、現世のあらゆる苦難障害を救済するのはもとより、来世もまた安穏無事の境涯に導き給うので、いわば万能の菩薩であって、われわれ凡夫には至上の菩薩である。この故に仏像彫刻中でも観音像が第一位を占めている。これは実に観音信仰の篤信を物語る証である。

この観音の利益を克明に記述した経典が「妙法蓮華経観世音菩薩普門品第二十五」である。この法華経に関係のない宗派でも、観音の造像は盛んであるから、観音信仰は超宗派的に、一般大衆に根強く喰い込んでいる。

法華経は二十八品から成り、その第二十五品が、俗に観音経と愛称され、大衆化されている経典である。先づ第一にこの観音経で説かれていることは、

善男子若有無量百千万億衆生受諸苦悩。聞是観世音菩薩。一心称名観世音菩薩。即時観其音声皆得解脱。

即ち苦悩している一切の衆生が、観音の名号を称えると、即時に「皆得解脱」とある。これはどんな苦難、福徳でも、観音にすがれば必ずたちどころにかなえていただけるということである。その上に観音は、上は仏身から、下は一般大衆、更に天竜夜叉、人非人等に至るまで、三十三種の身に変じて、各処に現われ、臨機応変に利益が総てに行き届くように用意されていると説いてある。そして観音は常にわれわれの身辺におられるというのである。このように説いた普門品は、遂に有名な偈文となり、人口に膾炙するに至った。

「爾時無尽意菩薩。以偈問曰

世尊妙相具　我今重問彼　仏子何因縁
名為観世音　云々」、の如く五言ずつで、百四節、五百二十字から成り立つ偈文で、本文で説かれた諸功徳を繰返し要約したところが多いが、明快な文章で、観音信仰の中心となすものである。この偈文の十二の功徳は、

仮使与害意　推落大火坑　念彼観音力　火坑変成池
或漂流巨海　竜魚諸鬼難　念彼観音力　波浪不能没
或在須弥峯　為人所推堕　念彼観音力　如日虚空住
或被悪人遂　堕落金剛山　念彼観音力　不能損一毛
或値怨賊繞　各勢力如害　念彼観音力　或即起慈心
或遭王難若　臨刑欲寿終　念彼観音力　力尋段段壊
或囚禁枷鎖　手足被杻械　念彼観音力　釈然得解脱
呪詛諸毒薬　所欲害身者　念彼観音力　還着於本人
或遇悪羅刹　毒龍諸鬼等　念彼観音力　時悉不敢害
若悪獣圍繞　利牙爪可怖　念彼観音力　疾走無辺方
蚖蛇及蝮蠍　気毒煙火燃　念彼観音力　尋声自回去
雲雷鼓掣電　降雹澍大雨　念彼観音力　応時得消散

以上が十二の功徳である。その次ぎに、「衆生被困危　無量苦逼身　観音妙智力能　救世間苦　云々」と説かれ、如何なる困難、即ち三毒

煩悩も観音の妙智力によって救われることを強調してある。また他の経典にも、しばしば、観音の利益が説かれている。「般若波羅密多心経」中にも「一切の苦厄を度す」とあり、大仏頂有楞厳経には「子を求むれば子を得、長寿を求むれば長寿を得る」とある。

以上を要約して、観音は、凡夫の常に願うところを成就することに於て、全く余すところがない。そして現世利益であり、また来世得脱の利益も、阿弥陀如来が、念仏行者を、極楽浄土に来迎引接されるとき、観音は金蓮台を捧げて、凡夫を極楽浄土に親しく運ばれるという大衆との密接な関係もあり、実に現在と未来に於て偉大なる利益の持ち主である。この故に各時代を通じて、驚くべき熱烈な信仰を得、従って造像もおびただしい数にのぼったのである。

さらに観音の在所について考察すると、それは補陀洛山、梵語では potalaka と称し、訳して補陀洛迦、補陀落、或いは白華、小花樹、又は光明山などと訳す。華厳経には、この山は南方にあり、美しい水が流れ、樹木は鬱蒼とし、芳香が四方に満ちており、観音は金剛宝石上に結跏趺坐して、無量の菩薩がこれを恭敬囲繞していると説く。また一説には南印度の地名で秣剌耶という山の東方にある実在の地と説く。わが国の補陀洛山の信仰は、一層理想化され、補陀洛山浄土とも呼び、南方にある浄土と信じた。日本仏教史によれば、各時代とも補陀洛山浄土の信仰は盛んで、補陀洛山浄土変[註]が多い。

註　変は変相の略で、仏の世界や経典の説く世界を大衆に解り易く図示したもの

就中、清水寺、浅草寺、石山寺、長谷寺等は衆知の如く、奇瑞、逸話が伝えられ、現在も尚信仰が盛んである。石山寺縁起に「惣而六十二億恒河沙の菩薩の中に観音の功徳ことにすぐれ云々」とある。従ってこの観音を祀る寺院を巡拝すると、一尺大きな功徳を受けるとされた。それが霊場巡礼である。その代表的霊場は、四国三十三所観音霊場である。別名を三十三番札所とも言う。この霊場は、法華経観世音菩薩普門品に説かれている三十三身の数に応じて霊場を選んだものである。この三十三身とは、観音が衆生救済のために、その衆生の性質、根性に応じて身を示現されることで、その示現に三十三あるというのである。この三十三を総合すると仏、声聞、梵釈天、君臣諸衆、八部衆が網羅されているが、法華経普門品では、上記とやや異り、人身、非人身、婦女身、童目天女身の代りに長者婦女身、居士婦女身、宰官婦女身、婆羅門婦女身の四婦女身が配してある。しかし形象は示してはない。具体的な名称は紙数のないため割愛せざるを得ない。

七、おわりに

仏像と、私との縁もかなりの年月を経たが、自信は失われていくばかりである。道は遠い、それだけに研究は続けなければならないと教えられる。仏像については、これまでに、数回研究を発表したが、今回は、特に観音像の研究を集約した。しかし頁数に制限があるので、充分のことは載せられなかったが、一応の概要を知るには、何等かの役に立つと思う。現代生活が、機械化することによって、精神面が強調されつつあることは当然である。今夏も仏縁により、石見部、出雲部の禅の会にでかけて、若い人々の真剣な生活に出会って力強かった。そして私の研究も無駄ではないと思った。

仏像を視覚性の立場から研究するのが、私の務めであるが、仏像は

信仰のためのものである以上、ついに経典にまで及んでしまった。もちろん未熟であるが——本文でも、或いはその方に深入りした傾きもあるが、致し方がない。研究にあたり、次ぎの参考書から多大の示唆を受けたことを感謝して擱筆をする。

—昭四二・八・一三—

主なる参考文献

逸見　梅著　観音像　誠信書房
石田茂作著　仏教美術の基本　東京美術社
天野茂時著　島根の仏像　島大山陰文化研究所
望月信成著　美の観音　創元社
清水谷泰順著　新釈観音経講話　実業之日本社
倉田文作著　仏像のみかた　第一法規出版社
佐和隆研著　仏像図典　吉川弘文館